ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

ー第四章ー

1000450650-B

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

― 第四章 ―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

第四章　終幕、そして……　―The Final Act―

1

極東の〝魔族特区〟絃神島は、東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島だった。

島の総面積はおよそ百八十平方キロメートル。総人口は約五十六万人。ギガフロートと呼ばれる超大型浮体式構造物を連結して造られた、機械仕掛けの巨大都市である。

島の中心部にはキーストーンゲートと呼ばれる楔形の建物が存在し、文字どおり島の要石として、絃神島のすべての都市機能を掌握している――はずだった。

しかし今、キーストーンゲートの周囲は鬱蒼と茂る深い森に覆われて、未来的な高層建築物があったはずの場所には、漆黒の城塞がそびえ立っている。

怪物の顔を思わせる邪悪な外観――

古いおとぎ話に出てくる、魔王の居城のような禍々しい城だ。

「あー……今イチ状況が把握できないんだが……」

彩海学園の校舎から、そびえ立つ魔王城を遠目に眺めて古城が言った。

時刻は夕暮れ。彩海学園の学園祭――彩昂祭の初日が終わる直前だ。

「本当に浅葱が、あの城に連れて行かれたのか？」

「連れ去られたのは藍羽さんだけじゃないけどね」

古城の疑問に答えたのは仙都木優麻だった。黒いジャケットにルーズなネクタイ姿の、息を呑むほどに端整な男装少女だ。

国際犯罪組織〝図書館〟の残党を追っていた優麻は、復活した闇誓書の調査のために、彩海学園を訪れていた。電子情報化した闇誓書の支配から彩海学園を解放できたのは、たまたま居合わせた彼女たちのおかげである。

しかし闇誓書に汚染された人工知能モグワイは、電子ネットワークを経由して逃走。人工知能の本体でもあるキーストーンゲート内のスーパーコンピューターに逃げ込んだ。しかもその際にモグワイは、なぜかオペレーターである浅葱を連れ去ったらしい。

「正確なことはわからないけど、藍羽さん以外にも、攫われた人が大勢いるみたいだ。たぶん、闇誓書の起動に必要な魔力を確保するのが目的だろうね」

「そうか……モグワイは魔力を使えないんだよな」

「うん。たとえ闇誓書と融合したとしても、人工知能は闇誓書を動かす魔力を供給できない。逆に言えば、魔力源さえ調達できれば、闇誓書の力を引き出せるということでもあるけどね」

「……ってことは、やっぱりこれはモグワイが実体化させた世界ってことか。あいつはなにがしたいんだ？」

夕暮れの絃神島の景色を見回して、古城は激しく困惑する。

現実世界を所有者の思うがままに書き換えるのが、最悪の魔導書とも呼ばれる闇誓書の力だ。モグワイはその闇誓書を使って、キーストーンゲートを魔王城に変容させたのだろう。

しかし現実世界が改竄されているのは、キーストーンゲートの周辺だけ。古城たちがいる彩海学園を含めて、絃神島のその他の区画に変化はない。電力や水道などの供給も、特に問題なく行われているようだ。

「それはよくわからないな。人工知能が闇誓書に汚染されたこと自体、そもそも前代未聞の出来事だしね。今のところ人間に対して直接的な危害を加える意思はなさそうだけど」

優麻が肩をすくめて言った。彼女にとってもモグワイの行動原理は謎らしい。

「でも、このまま放置しておくわけにもいきませんよね」

劇の衣装のチャイナドレスを着ている雪菜が、硬い表情で訊いてくる。

「そりゃまあ、そうなんだろうけどな」

古城は顔をしかめて無意識に呻いた。

いくら実害がないといっても、それは現状に限った話だ。モグワイの真の目的がわからない以上、将来的に闇誓書が人類の脅威になる可能性は排除できない。

それに連れ去られた浅葱たちのこともある。事態がこれ以上ややこしくなる前に、闇誓書に汚染されたモグワイを止めるべきだろう。

「だけど闇誓書はモグワイと融合してるんだろ？　それを消去するなんてことができるのか？　デジタルデータなんか、いくらでもコピーできるだろ？」

『それについては、おそらく心配無用でござる』

校舎の壁に張りついていた超小型有脚戦車の乗員が、時代がかった口調で答えてくる。ごつい戦車のハッチから顔をのぞかせているのは、幼い外国人の少女だった。白いスクール水着風の操縦服の胸元には、平仮名で「でぃでぃえ」と彼女の名前が書かれている。

『モグワイ殿は絃神島を管理する五基のスーパーコンピューターの現身でござる故、絃神島以外の環境では実体を維持できないでござる。それはモグワイ殿と融合した闇誓書も同様でござろう』

「闇誓書が無制限に拡散するような最悪の事態は免れた、ってことか」

〝戦車乗り〟の異名を持つ少女ハッカー――リディアーヌ・ディディエの説明に、古城は安堵の溜息を洩らした。

モグワイは世界最高水準の人工知能であり、その高性能すぎるプログラムを実行できるコンピューターは、絃神島にしか存在しない。闇誓書をも取りこむモグワイの性能の高さは、同時に闇誓書の拡散を防ぐ足枷でもあったのだ。

『闇誓書に汚染される前のモグワイ殿のデータは、人工島管理公社にバックアップされているはずでござる。故に現在動作中のモグワイ殿を強制終了することができれば――』

「バックアップのデータから、汚染前のモグワイを復活させることができるんだな」
『然様にござる。然らば闇誓書のデータも自動的に消滅するでござろう』
「途中のセーブデータからゲームをやり直すみたいなもんか」
リディアーヌの専門的な説明を、よくわからないなりにいちおう理解する古城。話を聞いているぶんには、それほど難しいことではないと感じられる。
しかしリディアーヌは、不意に深刻そうに声を潜めて、
『ただし問題は女帝殿でござるな』
「……女帝？　浅葱のことか？」
『先ほどから人工島管理公社のサーバーにハッキングを仕掛けているものの、防壁に阻まれて侵入できないのでござる。面目次第もござらぬ』
「モグワイさんが藍羽先輩の力を利用して、外からの侵入を防いでいるということですか？」
リディアーヌの説明を聞いた雪菜が、驚いたように顔を上げる。
華やかな見た目からはあまり想像できないが、浅葱の特技はプログラミング。それも〝電子の女帝〟と同業者に畏怖される、天才的なハッカーだ。彼女の驚異的な能力は、幼いころから軍事企業で英才教育を受けたリディアーヌをも凌駕するという。
モグワイは、その浅葱の知識や経験を借りて、リディアーヌの攻撃を防いでいるらしい。
「なるほどね。藍羽さんを攫っていった理由はそれか……」
ふむ、と顎に手を当てて優麻が呟く。
古城は不機嫌そうに唇を曲げて、
「だったら俺たちが浅葱を連れ戻せば、モグワイの防壁ってやつを破れるのか？」
『如何にも。女帝殿さえ救出できれば、あとは拙者に任せるでござる』
「そうか……まあ、いちおう話はわかったが……」
きっぱりと断言するリディアーヌの声を聞きながら、古城は再び魔王城へと視線を向けた。
「浅葱を助け出すってことは、結局、あの城まで行かなきゃいけないってことだよな？」
「なんだか嫌な予感がするね。ボクの気のせいかもしれないけど」
優麻が重々しい口調で同意する。
「気のせいじゃねーよ。どう見ても罠が仕掛けてますって気配ありありだろ」
モグワイが立てこもる魔王城の周囲は、近づく者を拒むような険しい断崖と、深い森に囲まれている。それらの障害を乗り越えて城まで辿り着くのは、見るからに難儀なことだった。
「大丈夫。古城ならなんとかなるよ」
そう言って優麻は爽やかに微笑んだ。古城はふてくされたように彼女を見返して、

「他人事だと思って気楽に言ってくれるな……！　てか、おまえなら、あの城まで空間転移で一気に跳べるんじゃないのか？」
「できればボクもそうしたかったんだけどね。空間制御系の魔術は封じられてるみたいだ」
空間転移用の門を開くような仕草をしながら、優麻は残念そうに首を振る。
魔女である優麻の本来の能力なら、ここにいる全員を連れて、一瞬で魔王城まで移動することも可能なはずだ。しかし優麻が何度試しても、転移用の門は開かない。モグワイが闇誓書の力を使って、優麻の魔術を妨害しているらしい。
「どうあっても、俺たちにあの森を通らせたいわけか」
溜息まじりにそう呟いて、古城は赤い有脚戦車に向き直った。
「しゃあねーな……えーと、リディアーヌ、だっけ？　あの城まで俺を連れてってくれ。その背中、無理すれば二、三人は乗れるだろ？」
『任せるでござる、彼氏殿。さあ、二号殿もご遠慮召されるな』
古城たちがよじ登りやすいようにと、リディアーヌが戦車の姿勢を低くする。もともと人を乗せるように造られているわけではないのだが、整備用のハシゴや取っ手があるので、しがみつけないことはないだろう。
市街戦用に開発された有脚戦車なら森の中も問題なく走破可能だし、万一戦闘になった場合には、この過剰なまでの火力と装甲が頼もしい。それになにより徒歩で行くより、圧倒的に速くて楽だ。
「二号ではないです……」
リディアーヌの呼びかけに納得できない表情を浮かべつつ、雪菜が有脚戦車の背中に乗った。優麻も同じく甲羅に跨がり、古城は戦車の後端に無理やりつかまる。
それを確認したリディアーヌが、学園の外に向けて戦車を発進させた。しかしそれから十メートルほど走ったところで、ガクッ、と力尽きたように停止する。
「お、おい、どうした……!?」
急停止の勢いで振り落とされそうになりながら、古城が喚いた。リディアーヌは少し困ったように頼りなく笑って、
『どうやらバッテリーが尽きたようでござる』
「……動かないのか、この戦車？」
「モグワイ殿に乗っ取られている間に、派手に戦ったようでござる故。今しばらく充電すればなんとか……これをコンセントに挿してきて欲しいでござる」
そう言ってリディアーヌが戦車の充電用ハッチを開けた。そこに内蔵されていたのは、ありふれた百ボルト用の電源プラグだ。
「家庭用コンセントで充電するのかよ……」
軽い頭痛を覚えながら、古城は電源プラグを校舎のコンセントに挿しこんだ。
このレベルの戦術兵器にしては、いかにも頼りない充電機能である。満充電まで、いったい何時間かかるのか見当もつかない。

「仕方ないな。ボクはここに残るよ、古城。リディアーヌさんの護衛が必要だろ？」
優麻が苦笑しながらそう言った。
浅葱が人質になっている今、キーストーンゲート内のサーバーをハッキングしてモグワイを強制終了できるのは、事実上リディアーヌだけである。そして有脚戦車が動かないとなると、リディアーヌは完全に無防備だ。強制終了を恐れるモグワイが、彼女を狙ってくる可能性は高かった。
「やっぱり歩いて行くしかないみたいですね」
戦車の背中から降りながら、雪菜が小さく溜息を洩らした。
「マジか……」
校舎の外の空を見上げて、古城は、勘弁してくれ、と頭を振る。
日没直前の空の色は、血に濡れたような不吉な真紅だった。

2

古城と雪菜が魔王城の麓に辿り着いたのは、それから約一時間後のことだった。予想よりも早く着いたのは、バスやモノレールなどの交通機関が普通に動いていたからだ。
異変が起きているのはあくまでキーストーンゲートの周辺だけであり、それ以外の地区では絃神島の施設は正常に動作しているらしい。被害が少ないのは喜ばしいことだが、モグワイの目的がますます謎めいて、余計に不安でもあった。
「島の中心部がこんな状態なのに、意外にみんな落ち着いてますね」
走り去っていくモノレールの車両を見送りながら、雪菜が当惑したように言う。
「これも闇誓書の効果でしょうか？」
「いや、どうだかなー……」
古城が、決まり悪げな表情で頭をかいた。
「なんだかんだで〝魔族特区〟の住人は、この程度の異変には慣れっこだからな……今んとこ交通網やインフラは普通に動いてるし、差し迫った命の危険もなさそうだし」
「なるほど……」
「だから、やっぱ問題はキーストーンゲートなんだよな……ったく、なんなんだよ、この森は」
薄暗い茂みに足を踏み入れながら、古城が不満を口にする。
深い森と化したキーストーンゲート跡地は、想像以上に不気味な場所だった。
吸血鬼である古城はもとより、霊視に優れた雪菜もかなり夜目が利くほうだ。だが、そんな古城たちの目をもってしても、夜の森の中はほとんど見通せない。密集する木々の枝に加えて、うっすらと漂う夜霧が視界を遮っているからだ。
「懐中電灯を持ってきたのは正解でしたね」
学校の備品の懐中電灯で、足元の道を照らしながら雪菜が言う。ちなみに彼女は学校を出る前に、いつもの制服に着替えていた。背中には銀色の槍を収めたギターケースを背負っている。
「気をつけてください、先輩。これだけ魔力が充満していると、敵が隠れていても気配に気づけないと思います」
「奇襲されるまでわからないってことか……」
古城が不安そうに唇を噛む。
魔王城へと続いているのは、迷路のように蛇行する細い一本道だ。どんな罠が仕掛けられているか正直わかったものではなかった。
警戒しながら進む古城たちの前に、やがて奇妙な人工物が現れる。
森の木々の代わりに立ちはだかっていたのは、密集する四角い石の群れだった。
「なんだこれ……墓か？」
無惨に破壊された墓石を見回して、古城が声を硬くする。
森の中に突然現れたのは、荒廃した古い墓地だった。周囲の雑草の伸び具合からして、放置されて数十年は経っているはずだ。
モグワイが闇誓書で創り出した空間に、なぜこんな場所が存在するのかと古城は訝り、
「――っ!?」
その墓石の背後に浮かぶ影に気づいて、古城は全身を凍らせた。
「先輩？」
立ち竦む古城の姿に気づいて、雪菜が困惑の表情を浮かべる。しかし古城はなにも答えない。ただ目元を恐怖に歪めるだけだ。
「どうしたんですか、先輩？」
「いや、そこの墓石の陰から、誰かが、俺たちを見ていたような気がして……」
「え？」
雪菜が驚いたように目を細めて、懐中電灯を墓石に向けた。
しかしそこに浮かび上がるのは、朽ち果てた卒塔婆と雑草だけである。
「誰もいないみたいですけど……」
「だよな……悪い」
古城は引き攣った笑みを浮かべて、脅かしたことを詫びた。
たしかに人の気配があったと思ったが、単なる勘違いだったらしい。怖じ気づいていたつもりはないのだが、そう思われても仕方ない状況だ。
情けない気分で古城は周囲を見回し、そして今度こそたしかにそれを見た。
「姫柊、後ろだっ！」
「え!?」
雪菜の背後を指さして、古城が怒鳴るように警告した。
銀色の槍を引き抜きながら、雪菜が弾かれたように振り返る。
しかし雪菜が身構えたときには、すでに古城が見た人影は消えていた。
それでも彼女は油断なく周囲を見回して、そしてジトッと

した半眼を古城に向けてくる。
「わたしの後ろが……なんですか……？」
「ま、待て……今、たしかにその辺に矢瀬がいたんだって……！」
「矢瀬先輩……ですか？」
「ああ。矢瀬の幽霊だ！」
迷いなく言い切る古城の顔を、雪菜が責めるように睨めつけた。
「先輩。こんなときにふざけないでください」
「嘘じゃねえ！　今、たしかに落ち武者姿の矢瀬がいたんだよ！」
古城が必死の形相で力説する。
闇の中に一瞬だけ現れた人影は、間違いなく古城の同級生の矢瀬基樹だった。
ただし彼が身につけていたのは血まみれの戦装束で、全身に折れた矢が刺さったままという壮絶な姿だ。まさに怪談で語られる落ち武者そのままの姿である。
しかし雪菜は、冷ややかな疑惑の視線を古城に向けて、
「落ち武者の幽霊ということは、矢瀬先輩のご先祖ですか？」
「いや、そこはあまり重要なポイントではないと思う」
雪菜に信じてもらえないことに、もどかしさを覚えつつ古城は反論した。
落ち武者と化した矢瀬に恨まれる理由は特に思いつかないが、なにしろこの森はまともではない。油断するべきではないだろう。先に歩き出した雪菜を追って、古城は落ち着きなく視線を彷徨わせながら、墓石の合間を進んでいく。
そんな古城の目の前に、矢瀬が再び姿を現した。
「う、うおっ!?」
あまりにも生々しい落ち武者の姿に、古城がたまらず悲鳴を上げる。
雪菜は呆れたように溜息をつきながら、怯える古城を振り返り、
「先輩、もういい加減に――」
その次の瞬間、ひゃっ、と短い悲鳴を上げて、雪菜は小さく飛び跳ねた。
しかし、落ち武者の幽霊はすでに消えている。それを見て驚いたわけではなさそうだ。
「姫柊……？」
「い、いま……なにか冷たいものが、わ、わたしの脚を触って……」
自分の太腿を見下ろして、表情を強張らせている雪菜。彼女は幽霊に恐怖したのではなく、物理的な刺激に反応しただけらしい。
「脚？　そう言えば少し濡れてるな……」
雪菜の前に屈みこみ、古城は彼女の太腿を確認する。制服のスカートの裾から伸びる雪菜の白い肌の表面が、しっとりと濡れて懐中電灯の光を反射していた。

ちょうど人間の掌が触れた程度の範囲である。
「そ、そんなにジロジロ見ないでください！」
スカートの裾を押さえた雪菜が、確認作業を続ける古城に向かって叫ぶ。と、その雪菜が、突然、電気に打たれたように背筋を仰け反らせた。
「ひゃうっ!?」
「うおっ、危ねっ!?」
見えないなにかに怯えたように雪菜が銀色の槍を振り回し、その攻撃に巻きこまれた古城が、青ざめながら地面に伏せる。しかし雪菜はそれにすら気づかず、泣き出しそうな表情を浮かべ、
「こ、今度は背中に、なにかぬるぬるしたものが……」
その感触がよほど不快だったのか、やけに扇情的な動きで身をよじる雪菜。
古城は、そんな彼女の背後にゆっくりと回りこみ、
「ぬるぬるしたものって……これか……？」
そう言って雪菜の首筋に触れている物体をつまみ上げた。それは人の掌ほどの大きさの、ブヨブヨとした灰色の塊だ。生の板コンニャクである。濡れたコンニャクが、目に見えないほどの細い釣り糸で、森の木の枝から吊り下げられていたのだ。
さっき雪菜の脚に触れたのも、別の木にぶら下がっていたコンニャクだったのだろう。
ようやく事情を把握した雪菜が、なおも混乱したように首を傾げて、
「コ……コンニャク、ですか？　で、でもいったいどうしてこんなものが……!?」
「なんとなく話が読めてきたぜ」
気怠く息を吐きながら、古城はぐったりと項垂れる。
雪菜は、そんな古城を困惑の表情で見返した。
「え？」
「モグワイが闇誓書の力を使って、なにをしようとしてたのかって話だよ。あいつはもともと、お化け屋敷のために呼び出されてたんだ」
「お化け屋敷……彩昂祭の出し物のことですか？　先輩たちのクラスの？」
「ああ。だからモグワイは、たぶん今も忠実に浅葱のプログラムを実行してるんだと思う」
古城は投げやりな口調で推理を続ける。
彩昂祭における古城たち高等部一年Ｂ組の出し物は、ＶＲＭＭＯ――仮想現実大規模多人数お化け屋敷だった。〝魔族特区〟の技術を応用した幻術投影サーバーによる、リアルな恐怖体験というのが最大の売り文句だ。
その幻術投影サーバーのプログラムを担当したのが、ほかならぬ藍羽浅葱である。
そして浅葱は彩昂祭の期間中、サーバーの維持管理をモグワイに任せていたのだ。闇誓書に汚染されたモグワイに――
「まさか、これはお化け屋敷……なんですか？　この森も

……？」

「森というより墓地なんだろ。肝試しの舞台にちょうどいいからな。で、あの城がお化け屋敷の本体ってわけだ。よく見ればそれっぽいデザインだぜ……」

夜空にそびえる魔王城を見上げて、古城がやる気なく呟いた。

怪物の顔を模した魔王城のチープなデザインは、遊園地にある西洋風のお化け屋敷にそっくりだ。

闇誓書に汚染されたモグワイが奇妙な森や城を創り出して立てこもったのは、お化け屋敷を運営するというプログラムが原因だった。多少やり方が歪んでしまったものの、あの人工知能はただ忠実に命令を実行していたのだ。

「これが彩昂祭の出し物の一部ということなら、市民に被害がなかった理由もわかりますね」

雪菜が頬に手を当てて考えこむ。

だよな、と古城は面倒くさそうにうなずいて、

「そういうことなら、幽霊なんか気にしても仕方ないから先に進もうぜ。もちろん警戒するに越したことはないけどさ」

「そうですね。わかりました」

同意する雪菜の声が聞こえてくる。しかし、その声の方角は、さっきまで雪菜がいたはずの場所とは微妙にズレているように感じられた。

「……姫柊？」

違和感を覚える古城の手を、雪菜がそっと握ってくる。

彩海学園中等部の制服を着た小柄な少女だ。背中には黒いギターケース。古城の手を引いて歩き出した彼女が、クスクスと笑いながら振り返った。

目も鼻も口もない、つるりとした顔で――

「うおおおっ!?」

のっぺらぼう化した雪菜に驚いて、古城はひとたまりもなく絶叫する。

その突然の悲鳴に驚いたのは、すぐ傍にいた本物の雪菜のほうだった。危険のとぼしい単なる肝試しだと、油断した直後だったのも災いした。たまらず彼女も悲鳴を上げて、

「きゃあああああっ！」

「どわあっ！」

予期せぬ方角から聞こえてきた雪菜の叫びに、古城が再び叫喚する。

暗く広大な森の中に、二人の悲鳴が反響していく――

3

「ようやく……着いた……か」

「酷い目に遭いました」

魔王城の入り口に到着したとき、古城と雪菜は息も絶え絶えという有様だった。

だだっ広い夜の森の中で、延々とリアルな肝試しをやらされたのだ。体力の消耗だけでなく、精神的な疲労感もかなり根深いものがある。

ともあれ古城たちの目の前には、巨大な城門が立ちはだかっていた。錆びた分厚い金属製の門扉が、軋み音を夜空に響かせながら、ゆっくりと左右に開いていく。

どうやら、入ってこい、と無言で告げているようだった。

「リディアーヌ、聞こえるか？」

古城は携帯電話を取りだして、教えられた番号からリディアーヌを呼び出す。

いちおうモグワイによる妨害を警戒していたのだが、意外にも回線はあっさりとつながった。

『おお、彼氏殿。息災でござったか？』

リディアーヌが妙なアクセントの時代劇口調で答えてくる。

「なんとかな。今、キーストーンゲートに着いたところだ」

『さすがは彼氏殿、お見事にござる。では、お二方はそのまま屋上に向かってくだされ』

「屋上？　モグワイの本体である五基のスーパーコンピューターは、キーストーンゲート地下十三階の第零層――海抜ゼロメートル地点に設置されていると聞いたことがある。そこはキーストーンゲートの中枢であると同時に、絃神島の中心地でもあった。

てっきり浅葱もそこに囚われていると思っていたのだが――

『お約束でござるよ、彼氏殿。囚われの姫君は塔の上でござるものでござる』

――まあ、実際のところは、携帯の基地局とＧＰＳ情報で、女帝殿の位置を割り出したのでござるが』

「なるほどな」

リディアーヌの説明に古城は苦笑する。モグワイの目的がアトラクション的なお化け屋敷の再現だとすれば、人質が最上階にいるというのは、いかにもありそうな設定ではあった。

『それから古城、モグワイくんに連れ去られた人質のことだけど――』

リディアーヌとの通話にまぎれて、優麻の声が聞こえてくる。なぜか古城を気遣うような口調だ。

「浅葱以外の生徒のことか？」

『うん。どうやら彼らの中に、凪沙ちゃんも含まれてるみたいだ』

「凪沙が……!?」

古城が顔つきを険しくして呻く。隣で古城たちの会話を聞いていた雪菜が、表情を強張らせる気配があった。

『あとはラ・フォリア王女や護衛の煌坂さんも行方不明になってるらしい。ほかにも被害者がいるかもしれない。くれぐれも気をつけて』

「わかった……サンキュ」

古城は優麻たちに礼を言って電話を切った。無意識に手の中で握り締めていた電話機が軋む。

「聞こえたか、姫柊？」

「はい……でも、ラ・フォリア王女や紗矢華さんはともかく、

どうして凪沙ちゃんまで……？」

雪菜が硬い口調で答えてくる。

闇誓書を起動するためのエネルギーの確保が目的なら、ラ・フォリアや紗矢華が攫われた理由はわかる。彩海学園の敷地内にいた人々の中では、彼女たちは突出して強大な霊力の持ち主だからだ。

しかし凪沙はそうではない。それなのに凪沙が攫われたことに、古城は何者かの悪意を感じた。まるで古城たちの知り合いだけを、狙い澄まして連れ去ったようにも思えてくる。

そんなふうに古城が疑念を抱いた直後――

「いやあああああああっ――！」

城の奥から声が聞こえた。悪意と怨念を感じさせる不気味な絶叫だ。

「この声……！」

「凪沙ちゃん!?」

一瞬だけ互いに目を合わせて、古城と雪菜は走り出す。

凪沙の絶叫は今も響き続けている。声そのものは凪沙のものだが、絶叫にこめられた異様な気配には、どこか非人間的な妄執が感じられた。

「なんだ、あれは？」

走り続けているうちに、周囲の風景が変質していた。そのことに気づいて古城は立ち止まる。

闇の中に浮かび上がったのは、荒れ果てた古い武家屋敷だ。

壁は崩れ、塀は破れ、庭は雑草に覆われている。人が住まなくなって何十年も経っているのだろう。完全な廃屋だった。

「井戸……？」

廃屋の庭にある古井戸に気づいて、雪菜がかすかな呟きを洩らした。

井戸の隣には、着物姿の娘が座りこんでいる。

長い髪をショートカット風に結い上げた、小柄な少女。暁凪沙だ。

「一枚、二枚……」

闇の中でうつろな表情を浮かべて、凪沙は不自然に手を動かしている。膝の上に載せた皿を数えているのだ。

「あの……凪沙ちゃん……？」

「なにやってんだ、おまえ」

戸惑いの感情を滲ませながら、古城たちが凪沙に呼びかける。

凪沙はのろのろと顔を上げ、意外にはっきりとした口調で答えてきた。

「なにって、幽霊だよ。皿屋敷の幽霊。お菊さん」

「いやだから、なんでおまえがそんなことやってんだって話だよ」

「だってほら、幽霊だし。恨めしやー……」

そう言って凪沙はふわりと空中に浮かび上がる。よく見れば彼女の身体はうっすらと透けて、背後の風景を映していた。

それに気づいて古城は息を呑む。

「これも闇誓書の力ってことか……!?」

「三枚、四枚……」

古城の質問に答えずに、凪沙が再び皿の枚数を数え始める。

今の凪沙は普通ではない。闇誓書と融合したモグワイによって、お化け屋敷の一部に変えられているのだ。

「なあ、姫柊。皿屋敷の幽霊って、どんな話なんだっけ？」

怒りと焦燥に表情を歪めながら、古城が訊いた。

「大切な十枚組のお皿の一枚を割った――という罪を着せられて、奉公先の主人に殺されてしまった女性の話です。それ以来、死体が捨てられた古井戸に彼女の幽霊が現れて、不幸を招くといわれてます。彼女がお皿を数える声を九枚まで聞いた者は死んでしまうとか」

「死んでしまう……!?　って、まさか、それも再現されてるってことはないよな!?」

雪菜の説明に、古城は言い知れぬ不安を覚えた。凪沙が実際に幽霊化している以上、皿屋敷の幽霊の呪いが再現されていても不思議ではない。

「わ、わかりません。でも、闇誓書のやることですから……」

「再現されてるかもしれない、ってことか――！」

雪菜がぎこちなくうなずいた。その間も凪沙のカウントは続いている。

「五枚、六枚……」

凪沙が九枚目を数え終わるまで、残り三枚。刻々と迫ってくる運命の刻限に、古城は半ばパニックになりながら、

「逃げろ、姫柊！」

「先輩!?」

「俺は大丈夫だ。たぶん。吸血鬼だし」

「そんなのわからないじゃないですか！　闇誓書が相手なんですよ！」

雪菜が泣きそうな表情で言い返す。

たしかに吸血鬼の真祖は不死身といわれているが、闇誓書の呪いが相手では分が悪い。実際、古城はかつて闇誓書に異能の力を奪われて、危うく死にかけたことがあるのだ。

「だからって凪沙をこのままほっとくわけにはいかないだろ……！」

「で、でも！」

「七枚、八枚……」

古城と雪菜が押し問答を続けているうちに、凪沙が新たな皿を数える。膝の上に残された皿はあと一枚だけだ。その皿に凪沙が手をかけた瞬間、

「くっ！　〝雪霞狼〟――！」

古城の身体を押しのけて、雪菜が握っていた槍を振るった。

全金属製の銀色の槍が、眩い純白の輝きを放つ。魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く神格振動波の輝きだ。

「きゅうう……」

「凪沙！」

純白の閃光に包まれた凪沙が、浮力を失って落下した。彼女

が地面に激突する前に、滑りこんだ古城がギリギリで抱き止める。
幽霊化していた凪沙の身体は、すでに実体に戻っていた。彩海学園の制服ではなく、僧侶の袈裟を着ているのは、演劇の途中でモグワイに連れてこられたからだろう。凪沙は西遊記で三蔵法師役だったのだ。
「戻った……のか。そうか、〝雪霞狼〟の魔力無効化能力で……」
「はい。役に立ってよかったです」
銀色の槍を携えて、雪菜が安堵の微笑を浮かべる。
魔力を無効化する雪菜の槍は、闇誓書に対しても有効だ。雪菜はその能力を使って、凪沙を闇誓書の支配から解き放ったのだった。
「くそ……肝試しにしてはやり過ぎだろ！」
乱暴に地面を殴りつけて、古城が唸る。
単なるお化け屋敷と思って甘くみたのは間違いだった。この魔王城はやはり危険だ。冷や汗で全身を濡らしながら、古城が奥歯を噛み鳴らす。
そして、ケケッ――と、どこからともなく聞こえてきたのは、古城の恐怖する姿に満足したような皮肉めいた笑い声だった。

4

眠っている凪沙を放置して、古城たちはそのまま先に進むことにした。下手に動かさないほうが安全だろう、と判断したのだ。凪沙に異変があればすぐにわかるようにと、雪菜が式神を配置してくれている。今の古城たちにできるのはそこまでだ。
ロウソクに照らされた薄暗い階段を上って、古城たちは次の階に辿り着く。
そこは木製の柱に支えられた吹き抜けの部屋だった。城の天守閣を思わせる和風の空間だ。
「この階には誰もいないのか？」
無人の室内を見回しながら、古城が呟く。
「先輩！」
その古城の行く手を遮って、雪菜が叫んだ。
その直後、落雷のような轟音が鳴り響き、激しい炎が室内を満たす。
「なんだこれは……!?　これも肝試しの一環か？」
降りかかる火の粉を払いのけながら、古城が呻いた。
恐怖を煽る暴力的な演出だが、炎が古城たちを直接巻きこむことはなかった。訪問者を脅かすだけの無害な仕掛けだ。
そして炎の中に浮かび上がったのは、多数のコウモリたちを従えた、十二単姿の背の高い娘だった。色素の淡い髪をポニーテールに結わえた、優美な顔立ちの少女である。
「ようやく来たわね、暁古城！　いい加減、待ちくたびれたんだけど！」
「紗矢華さん……!?」
傲然と見下ろしてくる煌坂紗矢華を眺めて、雪菜が困ったように眉を寄せた。
さっきの凪沙と同様に、紗矢華も闇誓書に操られているらしい。
「あれはなんの妖怪だ？」
露骨にうんざりとした口調で、古城が訊く。
雪菜はジッと紗矢華を観察して、
「長壁姫だと思います。姫路城の天守に隠れ住むという妖怪で、自在に人の心を読み透かし、未来の運命を占うと。その正体は神通力を得た妖狐であるとも、邪神であるとも、八百匹の眷属を従えた妖怪の長であるともいわれています」
「意外に大物だな……煌坂のくせに」
「私のくせにってどういう意味!?」
古城の独り言を聞きつけた紗矢華が、十二単の袖口からいきなり剣を引き抜いた。獅子王機関に与えられた紗矢華の愛剣――〝煌華麟〟だ。
「言っておくけど、長壁姫は、かの宮本武蔵とも対面して名刀・郷義弘を授けたくらいなんだからね。もっと崇め奉りなさい！」
「そうなのか？」
感心したような表情を浮かべて、古城が雪菜に確認する。
はい、と雪菜はうなずいて、
「そういう伝説が残っているそうです。ただ、長壁姫は人間嫌いで、城主以外の人間が勝手に住処に立ち入ると、身のたけ一丈ほどの鬼神の姿になって追い払ったそうです」
「身のたけ一丈？」
「身長三メートルほどですね」
「ああ……」
ぽん、と古城が軽く手を打った。闇誓書化したモグワイが紗矢華を長壁姫役に選んだ理由が、なんとなくわかってしまったのだ。
「なんでそこで納得するのよ!?」
古城の何気ない反応に、紗矢華が剣を振り上げて激昂する。ファッションモデル並みの長身で、しかも抜群のスタイルを誇る紗矢華だが、本人は密かに自分の身長を気にしている。身のたけ一丈という長壁姫の設定が、そんな彼女のコンプレックスを刺激したのだろう。
「ぬおっ!?　待て、俺は関係ないだろ！　文句があるならモグワイに言えよ！」
「うるさいっ！」
「ひ、姫終！　頼む！」
長剣を振り回す紗矢華から、必死で逃げ惑いながら古城が叫んだ。
雪菜は、途方に暮れたような表情で銀色の槍を握り締め、
「えーっと……す、すみません、紗矢華さん！」
「きゃうっ！」
槍の石突きで殴られた紗矢華が、可愛らしい悲鳴を上げて昏倒する。闇誓書の効果が切れたのか、いつの間にか紗矢華の服装も普段の制服に戻っていた。

「ああ……くそ、なんなんだいったい……」
床に転がっていた古城が、ぼやきながら立ち上がる。
「急ぎましょう、先輩。近くにラ・フォリア王女もいるはずです」
「そうだな……なんかもう嫌な予感しかしないんだが」
雪菜の手を借りて立ち上がり、古城はふらふらと次の階に向けて歩き出した。
比較的常識人の紗矢華ですら、闇誓書に操られた結果がこのザマだ。ただでさえ非常識な、あの腹黒王女が闇誓書の影響を受けたらどんなことになるのか、想像するだけでも恐ろしい。
戦々恐々としながら、古城と雪菜は次の階層へと辿り着く。
そこで二人を待ち受けていたのは、思いがけない光景だった。
無数の獣たちの群れである。
「なんだ……これは!?」
「ね、猫!? 猫です、先輩。猫ですよ！ か、可愛い……！」
本来の目的を忘れて、輝くような笑みを浮かべる雪菜。
行灯の明かりに照らし出されていたのは、床を埋め尽くす子猫たちの大群だった。
子猫とはいえ数百匹も集まると、可愛らしさよりも恐怖を感じてしまう古城だが、猫好きの雪菜は特に気にならないようだ。猫に触りたくて、うずうずしているのが丸わかりである。
そしてそんな猫の群れの中心に、ちょこんと座っている人影がある。
全身をぴったりと覆う革スーツに、ネコミミをつけた銀髪碧眼の少女――叶瀬夏音だ。
「叶瀬!? おまえまで連れてこられてたのか!?」
驚いて問い質す古城を見上げて、夏音は招き猫っぽく片手を上げてみせた。そして彼女は、少し照れたように小首を傾げて、
「にゃ、にゃおう」
「……にゃおう？」
思わず夏音の言葉を反復しながら、古城は軽い目眩を覚えた。真面目に警戒していたのが、馬鹿馬鹿しく思えてくるほどの可愛らしさだ。
「なにやってるんだ、おまえ？」
思わず鼻血をこらえるように口元を押さえて、古城が訊く。
「妖怪、猫又でした。にゃお？」
「こ、これは凶悪ですね……」
雪菜が、圧倒されたようにぼそりと呟く。同性の友人である雪菜から見ても、やはり猫又化した夏音の愛らしさは危険なレベルらしい。
とはいえ、実際のところ、夏音が古城たちに危害を加えてくるというわけではない。
ただひたすら可愛いだけである。
「これはなんか……べつにほっといてもいいんじゃないか？」
「そうですね。普段とやってることがあまり変わらない気がしますし。可愛いし」
無責任な古城の提案に、雪菜が重々しく同意した。

「悪い、叶瀬。またあとでな」
「にゃお……」
夏音が名残惜しそうな表情を浮かべて、古城と雪菜に手を振っている。彼女の健気な態度に後ろ髪を引かれつつ、古城たちは子猫の群れをかきわけながら、次の階へと上っていった。
すでに古城たちが彩海学園を出て、五、六時間が過ぎている。時刻はすでに真夜中だ。
その間、暗闇の中で様々なトラブルに巻きこまれ、古城たちの疲労はピークに達していた。
警戒心を保つのもそろそろ限界が近い。
そんな古城たちの神経を逆撫でするように、闇の中から奇妙な音楽が聞こえてくる。エスニック風の華やかな旋律だ。緊張感と無縁なその調べが、逆に古城を不安にさせる。
そして階段を上りきった古城たちが見たのは、凄まじく豪華な宴会の風景だった。
「今度はなんだ……!?」
絢爛な黄金の輝きに目を細めながら、古城が歯を剥いて低く唸る。
壮麗な舞台と豪華な食事。露出度の高い踊り子たちが、生演奏に合わせて見事なダンスを披露している。あまりにも予想外のその光景に、古城たちは呆然と立ち尽くすしかない。
そして舞台のひときわ高い場所に、妖美な衣装を着た少女が座っている。この豪勢な宴会は、たった一人――彼女のためだけに催されているのだ。
古城たちの到着に気づいた少女が、気品あふれる麗しい笑顔を向けてくる。
際立って豪華な衣装にも、まったく見劣りしない威厳と存在感である。
ある意味ではそれも当然だろう。なにしろ彼女は正真正銘の王族。美の女神の再来とも謳われる、北欧アルディギアの王女なのだから。
「うふふふふ。わたくしは殷帝紂王が妃、妲己。またの名を白面金毛九尾の狐と呼ばれし者」
銀髪碧眼の王女ラ・フォリア・リハヴァインが、訊かれもしないうちからノリノリで役名を名乗ってくる。もはや闇誓書を利用して、ラ・フォリアが勝手に楽しんでいるのではないかと疑いたくなるような満喫ぶりだ。
「先輩、白面金毛九尾という妖怪は――」
「よく知らんがヤバいのはわかった。肝試しに出てくるレベルの妖怪じゃねえだろ、あれ」
ラ・フォリアがまとう異様なカリスマ性に、軽く圧倒されながら古城が言い返す。
九尾の狐は、美女の姿で王を惑わし、数々の王朝を滅ぼしたとされる大妖怪。妲己は彼女の化身のひとつだった。どうやらこの大宴会は、酒池肉林の故事で知られる彼女に合わせて催されたものらしい。

そしてなにより恐ろしいのは彼女の狡猾さと、八万余りの軍勢と渡り合ったとされる戦闘能力だ。闇誓書が、九尾の狐の能力を完全に再現しているとしたら、今のラ・フォリアは第四真祖にも比肩しうる危険な怪物である。悠長に様子を見ている余裕はない。

「――〝雪霞狼〟！」

銀色の槍を構えた雪菜が、ラ・フォリア目がけて突っこんでいく。

彼女の〝雪霞狼〟は魔力を無効化する破魔の槍だ。闇誓書がどれほどの影響力を行使しようとも、それを丸ごと消滅させて、世界を正常な状態へと書き戻す。

いかに九尾の狐といえども、雪菜の敵ではない――はずだった。が、

「えい！」

楽しげに声を弾ませて、ラ・フォリアが素早く右手を振った。

彼女の手の中に握られていたのは、銃剣を装着した黄金の装飾銃だ。その銃剣が青白い霊力の光に包まれて、雪菜の槍を撥ね飛ばす。

「なっ!?」

どうにか無事に着地した雪菜が、唖然とした表情でラ・フォリアを見る。

銀髪の王女の銃剣は、今や刃渡り七、八メートルもの光の大剣に姿を変えていた。アルディギア王国が誇る究極の対魔兵装――ヴェルンド・システムの疑似聖剣だ。

「ラ・フォリア！　おまえ、実は正気だな！」

古城が王女を指さして怒鳴る。

疑似聖剣は、精霊炉によって抽出された純粋な霊力の塊だ。その霊的な性質は〝雪霞狼〟の神格振動波と酷似しており、それゆえに雪菜の槍でも消滅させることは敵わない。

ただし、生身で疑似聖剣を扱えるのは、強力な霊媒であるアルディギア王族の女子だけだ。おまけに疑似聖剣の霊波は、闇誓書の支配も無効化する。つまり疑似聖剣を使えるということは、ラ・フォリアが正気であるというなによりの証拠なのだった。

にもかかわらず、ラ・フォリアは優雅な笑みを浮かべて、

「ふふっ、なんのことでしょう？」

「とぼけんなっ！　こっちが闇誓書に振り回されて死ぬほど大変な目に遭ってるってのに！」

「ですが、雪菜だけが古城とペアで肝試しというのは、さすがに不公平ではありませんか？」

ラ・フォリアが、可愛く機嫌を損ねたような表情で雪菜を見る。

唐突に非難の矛先を向けられた雪菜は、びっくりしたように目を見開いて、

「わ、わたしのせいですか!?」

「肝試しにかこつけて古城の手を握ったり、抱きついたりしたのではありませんか？」

「そ、そんなことは……決して……」

反論しかけた雪菜の台詞が、尻すぼみ気味に小さくなっていく。

いろいろと思い当たる節があったのか、引き攣った彼女のこめかみには、うっすらと汗が滲んでいた。基本的に素直な性格の雪菜は、嘘をつくのが苦手なのだ。

「と、とにかく……！　ここは実力で押し通らせてもらいます！」

開き直ったようにそう言って、再び槍を構える雪菜。

「できますか？」

ラ・フォリアが面白そうに笑って、眩く輝く疑似聖剣を掲げる。

火花を散らして睨み合う二人を、古城は半ば放心状態で眺めていた。こんな無益な戦闘は、どうにかしてやめさせたいところだが、正直二人を止める自信はない。

なにしろ雪菜の槍と王女の剣は、いずれも魔族にとって天敵ともいえる凶悪な武装だ。迂闊に二人の戦いに割りこんだ日には、吸血鬼の真祖といえども、命を落としかねなかった。

だからといって、このまま二人を放っておくわけにもいかない。

古城が、決死の覚悟を固めて飛び出そうと息を吸ったとき、

「にゃお……」

そんな古城の肩越しに、小さな声が聞こえてきた。子猫を抱いたままの叶瀬夏音が、驚く古城の隙を衝いて、無謀にもラ・フォリアたちの前に歩み出る。

「か、叶瀬さん？」

「あら……？」

思いがけない夏音の乱入に、さすがの王女も驚いて動きを止めた。

夏音はそんなラ・フォリアを見上げて、物怖じせずに忠告する。

「喧嘩は、駄目でした。お兄さんたちも困ってます」

「九尾の狐としては、ここからが見せ場だったのですが――」

夏音によく似た碧い瞳を細めて、拗ねたように唇を尖らせるラ・フォリア。

二人は共にアルディギアの王族。血縁上は夏音のほうが、ラ・フォリアの叔母という関係だ。互いに闇誓書に操られているはずの二人の少女が、なぜか正面から睨み合う。

しかしそれも一瞬のことだった。あっさりと折れたのはラ・フォリアのほうだ。

「夏音がそう言うのでは仕方がありませんね。肝試しの続きはまた機会にしましょう」

「そ、そうか……」

助かった、と古城が胸を撫で下ろす。だが、安心する間もなく、ラ・フォリアは悪戯っぽく微笑んで、

「ひとつ貸しですよ、古城。雪菜も」

「マジか、おい……」

恩着せがましい王女の言葉に、古城はどんよりとした表情

を浮かべた。
よもや闇誓書に操られていた事実を逆手にとって、自分に有利な約束を押しつけてくるとは、その交渉手腕には感心せざるを得ない。さすがはアルディギア王家の外交担当というべきか。
とはいえ彼女の気まぐれで、最悪の事態を免れたのも事実だった。
猫又役の後輩と、九尾の狐役の王女に見送られて、古城たちは再び次の階へと向かう。
長い螺旋階段の先には、中天に輝く満月が見えていた。
ついに魔王城の屋上に辿り着いたのだ。
「どうやら今のでお化け屋敷のイベントは最後みたいだな」
古城がホッと溜息をつく。屋上に浅葱がいることは、リディアーヌからの情報で確認済みだ。
大事な人質である浅葱に、モグワイが妖怪役をやらせるとも思えない。やはり先ほどのラ・フォリアが、最後の難関だったのだろう。あとは浅葱を回収して、モグワイの強制終了を待つだけだった。
しかし安堵している古城とは対照的に、雪菜は浮かない表情で目を伏せている。
「そう……でしょうか？」
「姫柊？」
「いえ、ラ・フォリア王女が疑似聖剣を使ったことが少し気になって。闇誓書に魔力を供給しながら、高位精霊の召喚ができるとは思えなかったので」
「そうか……あの疑似聖剣ってやつは、魔力を消滅させるんだよな……」
霊力の塊である疑似聖剣は、存在するだけで周囲の魔力を消失させる。いかにラ・フォリアが優れた霊媒でも、疑似聖剣を召喚しつつ、闇誓書に魔力を供給することは原理的に不可能だ。
それに紗矢華たちが闇誓書から解放されても、魔王城の存在は揺らいでいない。
つまり闇誓書を動かしていたのは、ラ・フォリアたちではなかったということになる。
「だとすれば、闇誓書に魔力を供給している誰かがほかに存在するはずです」
「誰かって……誰だ？　ラ・フォリアたちよりも強力な魔力源がいるってことか？」
古城が困惑に首を振る。もちろん浅葱一人では、闇誓書を動かすほどの魔力を供給するのは不可能だ。闇誓書が彩海学園で起動したときに、魔力源として使われたのは古城だった。だとすれば魔王城を実体化させているのは、第四真祖に匹敵する魔力の持ち主ということになる。
そんな強大な力の持ち主が、そうそう存在するとも思えないのだが――
不吉な胸騒ぎを覚えつつ、古城と雪菜は階段を上りきる。
空間がどこかでねじ曲がっているのか、魔王城の屋上には、

地下にあるはずのスーパーコンピューターの複合体が置かれていた。漆黒の石碑を思わせる本体から、太い電源ケーブルと冷却用のパイプ、その他の無数の配線が、うねうねと生物の血管のように伸びている。それらすべてがモグワイの本体なのだろう。
五基の石碑の中心には、制服姿で眠る浅葱の姿が見える。透明な棺桶を連想させる小さなベッドに閉じこめられてはいたが、とりあえずは無事らしい。
そして屋上にいたのは、もう一人――
「やあ、古城。いい夜だね」
「お……おまえかぁ――っ！」
白いスーツ姿で微笑むディミトリエ・ヴァトラーの姿を目にした瞬間、古城は絶叫とともに、自らの眷獣をぶっ放した。

5

「いろいろおかしいとは思ってたんだよ！　モグワイが単独で仕組んだにしては、やたら俺や姫柊をピンポイントで狙った嫌がらせをしやがって！」
古城が喚び出した水銀色の双頭龍の攻撃を、ヴァトラーはひょいひょいと軽やかによけていく。彼の口元に張りついているのは、無責任な冷笑だ。
「ふふ……なんの話かな？　ボクは名も無きお化け屋敷の案内人サ。そうだな、ヘビのお兄さんとでも呼んでもらおうか」
ヴァトラーが余裕の口調で答えてくる。よく見れば彼は、どこかで見たことがあるような金属製のマスクで、目の周りだけを覆っていた。いちおう変装のつもりらしい。
「やかましい！　いいから浅葱を返してもらうぞ、ヴァトラー！」
古城は乱暴に怒鳴りながら、眠っている浅葱へと近づこうとした。
その瞬間、古城の足元の床が、亀裂とともに崩れ落ちる。
ヴァトラーが召喚した巨大な蛇の眷獣が、古城の行く手を阻むように実体化して、禍々しく牙を剥いていた。
「残念だけど、それは無理だネ」
ヴァトラーが唇を美しく吊り上げて笑う。
「なに!?」
「彼女を助けたければ、ボクを倒してからにしてもらおうか、古城」
「それがおまえの目的か……！　俺と戦うためにこんな馬鹿な真似を……」
古城が呆れ果てたように天を仰いだ。
欧州〝戦王領域〟の貴族でありながら、ヴァトラーは有名な戦闘魔だ。不老不死で生きるのに倦んだ彼ら〝旧き世代〟の吸血鬼にとって、強敵との殺し合いは、残された数少ない娯楽なのである。
そしてヴァトラーが執心している遊び相手は、ほかならぬ世

界最強の吸血鬼――第四真祖だった。

第一真祖の配下であるヴァトラーが古城と戦うのは、政治的に多くの問題があるが、この魔王城の中ならば話はべつだ。肝試しの名目で、好きなだけ喧嘩をふっかけることができる。

ヴァトラーはそんなくだらない理由で、この馬鹿げたイベントを仕組んだのだ。

「闇誓書の力で、この空間は完全に外部から隔離されている。遠慮はいらない。好きなだけ暴れて構わないヨ。ここから先は、ボクたちの愛情表現だ」

両腕を大きく広げたヴァトラーが、芝居がかった口調で言い放つ。

「ふざけんなっ！」

無差別に魔力を撒き散らすヴァトラーを睨んで、古城は荒々しく息を吐いた。

「先輩……！」

苛立つ古城の横顔を、雪菜が不安そうに見つめてくる。

いかに闇誓書に支配された空間とはいえ、古城とヴァトラーの魔力がまともにぶつかったら、外部にどんな影響を及ぼすかわからない。

それに魔王城の内部には、まだ浅葱や凪沙たちが残っている。彼女たちの安全を確保するためにも、こんなところで戦っている場合ではないのだった。

「わかってる！　あいつの趣味につき合うつもりはねーよ！」

「そうか……なら、こちらから行かせてもらおうか――〝娑伽羅〟！」

ヴァトラーが実体化させた蛇の眷獣が、凄まじい質量で古城に襲いかかってくる。古城ごと魔王城を押し潰しかねない無遠慮な攻撃だ。

「うおおおっ!?」

「〝雪霞狼〟――！」

悲鳴を上げる古城を庇って、ヴァトラーの攻撃を受け止めたのは、雪菜が突き出した銀色の槍だった。純白の神格振動波の輝きが、巨大な眷獣を押し戻す。

「姫柊!?」

「先輩！　今のうちに藍羽先輩を！」

雪菜が余裕のない口調で古城に呼びかけた。

〝雪霞狼〟の直撃を喰らっても、ヴァトラーの眷獣は消滅しない。桁違いに濃密すぎる眷獣の魔力を、神格振動波が打ち消し切れないのだ。

それでも雪菜は一歩も引かずに、ヴァトラーの眷獣を正面から受け止めている。

「さすがは獅子王機関の剣巫……やるね」

ヴァトラーの瞳に歓喜が浮いた。哄笑を洩らす彼の左右に、新たな眷獣の影が浮かび上がる。

「なら、これはどうかな――〝摩那斯〟！　〝優鉢羅〟！」

「――なっ!?」

大気を震撼させながら降下してくる二体の蛇影に、雪菜が表情を凍らせた。雪菜と〝雪霞狼〟の力をもってしても、ヴァトラーの眷獣一体とようやく互角。この上、さらに二体の眷獣を相手にするのは不可能だ。

しかし雪菜に襲いかかる前に、蛇たちは、それぞれ撃ち落とされたように屋上に落下する。

「疾く在れ、〝獅子の黄金〟！　〝双角の深緋〟――！」

ヴァトラーの眷獣を止めたのは、古城が喚び出した二体の眷獣だった。雷光の獅子と緋色の双角獣　常軌を逸した破壊的な魔力の塊が、周囲の被害もお構いなしにヴァトラーの眷獣を叩き伏せる。

「ハハッ……いいヨ、古城。ようやくヤる気になってくれたね。そうこなくては……！」

劣勢に追いこまれているはずのヴァトラーが、愉悦に全身を震わせて笑った。そして彼は、虚空から二振りの剣を取り出し、その片割れを古城に向けて放り投げる。中世の貴族あたりが決闘で使う細身の片手剣である。

「剣……!?」

ずっしりと重い剣を受け取って、古城はかすかな戸惑いを覚えた。ヴァトラーの意図がつかめない。しかしヴァトラーは混乱する古城に構わず、すらりと自分の剣を抜く。

「吸血鬼同士の戦闘が、眷獣のぶつけ合いだけとは思わないことだ――」

黄金の輝きに包まれたヴァトラーの姿が、古城の眼前でかき消えた。魔族の身体能力を最大限に引き出した超加速を、古城の目がとらえきれなかったのだ。

「ちっ！」

ほとんど直感だけを頼りに、古城は鞘ごと構えた剣でヴァトラーの攻撃を防ぐ。

甲高い音を立てて金属同士がぶつかり、古城の耳元で火花が散った。一瞬でも反応が遅れていれば、古城の首は胴体から切り離されていたはずだ。

「ボクの剣をかわすか、古城！」

反動で吹き飛ぶ古城を眺めて、ヴァトラーは楽しげに目を細める。

「不死身の吸血鬼とて、破壊された脳の再生には相応の時間がかかる。そして意識が戻るまで、眷獣の制御は失われることになる。実力が拮抗した相手との戦いにおいて、眷獣の暴走が生み出す隙は致命的だヨ！」

手ほどきするように丁寧に説明しながら、容赦ない連撃を浴びせてくるヴァトラー。古城は必死でそれを避け続けた。最初から剣の腕でヴァトラーに敵うとは思っていない。フェイントと重心移動、チェンジ・オブ・ペース。古城はバスケのオフェンスの要領で、ただひたすらにヴァトラーの追撃をかわしていく。

思わぬ古城の善戦に、ヴァトラーは口元を綻ばせ、

「楽しませてくれるじゃないか、古城！　だけど眷獣の制御が

疎かになってるヨ　〝雛陀〟！　〝跋雛陀〟！」

懸命に逃げ惑う古城を嘲笑うように、ヴァトラーが新たに二体の眷獣を召喚した。

全身に灼熱の炎をまとう蛇と、無数の刃で覆った鋼色の蛇。互いに巻きついたその二体が、融け合って双頭の巨大な眷獣へと変わる。

二体の眷獣を融合させて、新たな眷獣を生み出したのだ。

「合成眷獣か！　しまっ――!?」

融合によって魔力を増大させたヴァトラーの蛇が、古城の眷獣たちを一撃で薙ぎ払う。

そして古城がそれに気を取られた一瞬の隙を衝いて、ヴァトラーは姿を消していた。

「先輩ッ！」

「遅いヨ　――！」

雪菜の悲鳴に古城が反応する。が、ヴァトラーの剣撃はすでに古城の額をとらえていた。ド派手な合成眷獣を囮にして、ヴァトラーは古城の死角へと滑りこんでいたのだ。

硬直して動けない古城の頭部を、鈍色の刃が刺し貫く――まさにそう思われた瞬間、ヴァトラーの剣が音もなく根元からへし折れた。

同時に、銃撃がヴァトラーを襲った。黄金の閃光がヴァトラーの足元に突き刺さり、周囲を巻きこんだ大爆発を引き起こす。

疑似空間切断に……呪式銃か！

突然の攻撃の正体に気づいて、ヴァトラーが苦笑した。

戦闘の余波で瓦礫の山と化した魔王城の屋上に、新たな人影が現れていた。銀色の長剣を携えている紗矢華と、黄金の装飾銃を構えたラ・フォリアだ。

「大丈夫、雪菜!?　あとついでに、ホントにどうでもいいけど暁古城も――」

紗矢華が古城たちに駆け寄りながら訊いてくる。かすかに頬を赤らめているのは、闇誓書に操られていたときの記憶が残っているせいかもしれない。

「紗矢華さん……!?」

「ラ・フォリアも、どうして――!?」

予期せぬ助っ人の出現に、驚いていたのは古城たちも同じだ。雪菜を溺愛している紗矢華はともかく、闇誓書によるお化け屋敷を存分に楽しんでいたラ・フォリアが、ヴァトラーと敵対する理由はないように思える。

「さすがにこれはやりすぎではありませんか、アルデアル公？」

しかしラ・フォリアは、自分のことを棚に上げ、見事に冷静な口調でヴァトラーを咎めた。おまえが言うな、と古城は内心で呟きつつも沈黙を保つ。

「わたくしや紗矢華はともかく、夏音や古城の妹君、それに彩海学園の生徒たちまであなたの趣味に巻きこむのは感心できません」

「それで？　だとしたらキミたちはどうするのかな、王女殿下？」

「わたくしが第四真祖に助勢したとしても、大義名分が立つということですね」
静かな微笑みをたたえたまま、ラ・フォリアが疑似聖剣を実体化させた。
紗矢華が、長剣を変形させた洋弓を構える。
ヴァトラーが獰猛な笑みを浮かべた。その双眸が真紅に染まる。まさに一触即発の状況だ。
「ああくそっ！　結局こうなるのかよ！」
絶望感に襲われながら、古城が叫いた。
ラ・フォリアたちの出現によって、事態が収束することを期待したのだが、それが完全に裏目に出た形である。戦闘魔のヴァトラーにしてみれば、遊び相手が増えただけという感覚なのだろう。このままでは被害が拡大する一方だ。
しかし雪菜は、そんな古城を見上げて華やかに微笑んだ。
「いいえ、先輩。肝試しの時間は終わりです」
えっ、と古城が訊き返す前に、落雷のような閃光が世界を白く染めた。
ガラスが砕け散るような音を残して結界が破れ、魔王城が消滅する。そして出現したのは、楔形の未来的な高層ビルだ。キーストーンゲートの本体である。
「闇誓書の効果が消えた？　サーバーに侵入されたのか……？」
ヴァトラーが当惑したような表情で背後を見た。
モグワイの本体である五基のスーパーコンピューターは、今も屋上に残ったままだ。だが、その中の一基の電源が落ちている。眠っている浅葱の防壁を突破して、リディアーヌが強制終了に成功したのだろうか、と古城は疑問に思う。
「違うな」
そんな古城たちの疑問に答えてきたのは、虚空から溶け出すように現れた小柄な女性だった。
フリルまみれの豪華なドレスを着て、深夜だというのに日傘をさした、人形っぽいシルエットの持ち主だ。
「那月ちゃん!?」
思わず彼女の名前を口にした古城は、次の瞬間、顔面に謎の衝撃を受けて仰け反った。
教師をちゃん付けで呼ぶな、と言わんばかりに、南宮那月が古城を睨んでいる。
「なるほど……キミの仕業か、〝空隙の魔女〟」
ヴァトラーが、玩具を取り上げられた子どものような視線を、那月に向けた。
優麻の空間転移を警戒したモグワイは、空間制御の魔術が使えないように、あらかじめ世界の法則を書き換えている。しかし那月には、その改変は通用しない。
なぜなら那月こそが、闇誓書の真の所有者だからだ。モグワイが保有している闇誓書のデータは、那月の記憶を元に再現された単なる複製なのである。
「しかし妙だな。いくらキミ自身が影響を受けないとはいえ、

どうやって人工知能の防壁を破ったんだい？」
「関係ないな。AIだかなんだか知らんが、要は闇誓書をコンピューターで再現しただけの代物だろう？　だったらコンピューターの電源を切れば、闇誓書の効果も消えるはずだ」
那月が突き放すような口調で言った。その言葉に、唖然としたのは古城たちのほうだった。
「電源を切ったって……まさかコンセントを引っこ抜いたのか!?」
「そういう乱暴な切り方をすると、コンピューターに悪影響が出るのでは……」
「知らん。システムの復旧やらなんやらは、藍羽がなんとかするだろう」
非難がましい古城と雪菜の問いかけに、那月が他人事のように一蹴する。
モグワイの本体は、あくまでも絃神島の都市機能を維持管理するためのコンピューターだ。それが壊れてしまったら、市民の生活にかなりの損害が出てしまうはずなのだが――
「おっと……モグワイとやらは、絃神島を管理する五基のコンピューターの現身、という話だったな」
那月はそれを理解した上で、いまだ稼働を続けている残り四基のコンピューターに目を向けた。そして、
「やれ、アスタルテ」
『命令受諾――』
那月の背後に控えていたメイド服姿の人工生命体の少女が、コンピューターの電源ケーブルを、強引に片っ端から引き抜いていく。予備電源や無停電電源装置を使って、どうにかメモリ内容を維持しようとするモグワイだが、アスタルテは巨大な人工眷獣を召喚。それらを完膚なきまでに破壊した。
圧倒的な防御力を誇る浅葱の防壁も、物理攻撃に対しては為すすべもなかった。外部記憶装置まで破壊され、モグワイは完全に沈黙する。
「まあ、こんなものか」
コンピューターの機能停止を確認して、那月が小さく鼻を鳴らした。
そして彼女は、傲然とヴァトラーを睨めつける。
「あとは貴様の処遇だが、さて、どうしたものかな――」
那月の冷ややかな視線に晒されて、ヴァトラーがめずらしく困ったように眉を上げた。
もちろんヴァトラーが本気になれば、ここにいる全員を敵に回しても、逃げ延びることは容易だろう。しかし闇誓書の結界が破れた今、彼が那月と戦えば、キーストーンゲートに被害が出るのは避けられない。そうなれば絃神島への滞在許可も取り消され、ヴァトラーは〝戦王領域〟へと強制送還されることになる。古城との再戦を望むヴァトラーとしては、その結末はなんとしても避けたいはずだった。
だからといって、このまま那月に逮捕され、闇誓書暴走の責任を取るとも思えない。

古城たちが固唾を呑んで彼の出方をうかがう中、ヴァトラーは、目元を覆っていた金属製のマスクを静かに外し、
「うわあ。ここはどこだ。ボクは今までなにをしてたんだろう」
大げさに足元をふらつかせながら、ものすごい棒読みでそう言った。
あまりにもわざとらしいヴァトラーの演技に、古城たちはもはや言葉もない。
「どうやらボクは闇誓書に操られていたみたいだ。自分がなにをしていたのか、まったく記憶にないヨ。だから責任能力もないということで」
「う……」
まったく悪びれもせずに、身勝手な理屈を振りかざすヴァトラーを、古城はしばらく呆気にとられて見つめていた。そして、
「嘘つけえええええェ――！」
古城が渾身の力で放った雷撃が、ヴァトラーの姿を呑みこんで、絃神島の夜空を白く染める。
こうして最悪の魔導書〝闇誓書〟は、完全にこの世から消滅したのだった。

6

結局、古城たちが彩海学園に戻ってきたのは、明け方近くになってからのことだった。
浅葱の救出やら検査やら事情聴取やらの厄介な手続きが、大量に残っていたからだ。
あれだけの異変に巻きこまれて、その程度で済んだのは、むしろ幸運だったともいえる。おそらく那月やラ・フォリアたちが裏から手を回してくれたのだろう。
しかし戻ってきた古城たちを待ち受けていたのは、彩昂祭二日目の様々なイベントだった。
結局、古城と雪菜は一睡もしないまま、それらの準備や手伝いに駆り出され、すべてが終了したときには、疲労困憊で意識が朦朧としている有様だった。
そんなこんなで、彩昂祭二日目終了直後の夜――
古城と雪菜はグラウンドの片隅で、燃えさかるキャンプファイヤーをぼんやりと眺めていた。
「なんとか無事に終わりましたね」
「そうだな……」
花壇の隅に腰掛けた雪菜の呟きに、古城が力なく微笑んで息を吐く。
グラウンド中央の特設ステージでは後夜祭のイベントが始まっていた。
コンテストの結果発表や、生演奏に合わせてのフォークダンスなど、希望者だけの自由参加だが、それなりに盛り上がっているようだ。

しかしもちろん古城たちには、そんなものにつき合う気力も体力も残っていない。
それでもこんなふうに祭りの余韻に浸っているのは、それほど嫌な気分ではなかった。
「本当に疲れたな、今年の彩昂祭は」
「そうですね」
「ありがとな、姫柊」
疲労で余計な気を遣う余裕のない古城は、ストレートに感謝の言葉を口にする。
闇誓書に囚われていた古城の解放。そして魔王城からの浅葱の救出。なんだかんだで今回も、雪菜にはずいぶん世話になった。彼女の協力がなかったら、無事に彩海学園に戻ってこられたかどうかも怪しいところだ。礼のひとつも言わなければ、罰が当たるというものだろう。
雪菜はそんな古城の神妙な態度に、少し驚いたように目を大きくして、
「いえ、わたしも楽しかったです。こんな賑やかな文化祭は初めてでしたし。それに……せ、先輩と一緒に肝試しも出来ましたから……」
頬を赤らめながらうつむいて、消え入りそうな声でぼそぼそと最後に言い足す雪菜。そして彼女は、ちらちらと横目で古城の反応をうかがう。
しかし古城は、雪菜の言葉をすでに聞いていなかった。
その前にほかの女子生徒が、古城を怒鳴りつけていたからだ。
「あっ、いた！　こんなところでなにサボってるのよ、古城!?　後片付けは!?」
「あれ、浅葱……？」
ゴミ捨ての帰路とおぼしき浅葱が、両手を腰に当てて古城を睨みつけてくる。
浅葱が後片付けを仕切っているのは、彼女が古城たちのクラスの学園祭実行委員だからだ。
ちなみに浅葱は闇誓書に囚われていた間の出来事を、ほとんど覚えていなかった。記憶の欠落に関しては、闇誓書のほうで辻褄を合わせてくれていたらしい。
破壊された校舎や教室内の飾りつけも、いつの間にか元通りに復元されていた。仮装現実お化け屋敷用の幻術投影サーバーもだ。おかげで古城たちのクラスも、滞りなく文化祭の出し物を続けることができた。
ただしモグワイは、無茶な強制終了の影響でメンテナンス中。
そんなわけでお化け屋敷の営業時間が終わるまで、浅葱はつきっきりで幻術投影サーバーの操作をしなければならなかった。なんだかんだで、今日一日、いちばん働いたのは浅葱だったりする。
そんなわけで古城としても、浅葱の命令には逆らいがたかったりするのだが――
「ちょっと待て。俺は自分の担当の分は終わらせたぞ。ポスタ

ーの撤去もさっき済ませたし」
「甘い。フォークダンスに参加する連中がごっそり抜けたから、人手が全然足りないの。あんたも誰かと踊るっていうのなら、片付けを免除してあげてもいいんだけど」
「いや、誰かって言われてもな……」
古城が、無理言うな、と肩をすくめてみせる。なにしろ彩昂祭のフォークダンスは、事実上、学園内のカップル専用のイベントなのだ。
「あ、古城君――！」
そんな古城を見かけて大きく手を振ったのは、優麻と連れ立って歩いていた凪沙だった。パタパタと子犬の尻尾のように髪を揺らしながら、彼女は古城たちのほうへと駆け寄ってくる。
「フォークダンス、古城は参加しないのかい？」
凪沙に手を引かれていた優麻が、人懐こく微笑みながら古城に訊いた。
古城は当然のように気怠く首を振り、
「いや、俺はいいよ。今日はもう疲れたし」
凪沙はそんな兄を睨んで、ムッと眉を吊り上げる。
「また古城君はそんなこと言って。参加賞にお菓子がもらえるんだよ。それに、こういうのは日頃の感謝の気持ちの表現なんだし。ねえ」
「え？　あ、はい」
「そ、そうかもね」
凪沙にいきなり同意を求められて、雪菜と浅葱はそれぞれ曖昧にうなずいた。
うんうん、と凪沙は満足げにうなずきながら、
「あと彩昂祭の後夜祭でフォークダンスを踊ったカップルは、かなりの高確率で将来結ばれて幸せな結婚をするという調査結果が報告されてるんだよね」
「……！」
その瞬間、息を呑んだのは雪菜と浅葱だ。二人の周囲の空気が変質した――気がした。
「へえ……で、古城はどっちの子と踊るんだい？」
優麻がクスクスと笑い含みに訊いてくる。
「どっちって……え？」
踊るのはすでに既定事項なのか、と古城は面喰らった。
すぐ近くにいる雪菜と浅葱の視線が、不意に古城の横顔に突き刺さる。
どうして急に彼女たち二人が、そんなにやる気を出したのか古城にはわからない。参加賞のお菓子が欲しかったのだろうか、と困惑混じりに考える。
ともあれ二人の妙な気迫に、古城はなぜか追い詰められた気分で冷や汗を流し、
「いや、どうしてもって言うなら俺は凪沙と踊ってくるわ」
そう言って古城は、咄嗟に妹を指さした。突然の指名に、ぱちくりと目を瞬く凪沙。

雪菜と浅葱は、シスコンめ、と言いたげな表情を古城に向けている。
しかし凪沙は、満更でもなさそうな態度でえへへと笑って、
「ごめんね、古城君。凪沙はユウちゃんと踊る約束をしてるんだ」
「な、なに……!?」
「悪いね、古城。またあとで」
悪戯っぽく手を振りながら、優麻が凪沙を連れて去って行く。
結局、古城の傍に残ったのは、謎の緊迫感を漂わせた雪菜と浅葱だけだった。凪沙の余計な発言のせいで、互いに牽制し合うような、ぎくしゃくとした空気が二人の間に流れている。
これ以上話がややこしくなる前にこの場を離れようと、古城はそっと腰を浮かし、その直後、
「あら、古城ではありませんか。ふふ、偶然ですね」
彼らの背後から聞こえてきたのは、優雅な気品に満ちた心地好い声だった。彩昂祭をすっかり満喫した様子のラ・フォリアが、護衛の紗矢華を連れて、ちょうど歩いてきたところだ。
そして雪菜と浅葱の間に流れる微妙な空気で、王女はたちどころに状況を察したらしい。ふふっ、と愉快そうに微笑むと、慣れた仕草で古城の前に手を差し出してくる。
「ここであったのもなにかのご縁――ということで、わたくしと一曲踊っていただけますか」
「え……？」
「お、王女!?」
ラ・フォリアの提案に一瞬唖然とした古城だが、それ以上に動揺していたのは紗矢華だった。身を挺して王女を護ろうと、彼女は古城の前に立ちはだかり、
「駄目です！　危険です！　こんな歩く性欲みたいな男と手をつないだりしたら、接触感染で妊娠しますから！」
「そんなわけあるか！　おまえは俺をどういう生物だと思ってるんだ!?」
あまりにも無茶な言いがかりに、古城が目を剥いて紗矢華に詰め寄る。
銀髪の王女は、あら、と少し困ったように小首を傾げて、
「そうなのですか。では、安全確認のためにあなたが先に古城と踊ってくれますか、紗矢華？」
「へ!?　わ、私……ですか!?」
古城と顔を見合わせた紗矢華が、爆発的に頬を赤らめた。
そして彼女は殊更に真面目な表情を浮かべ、
「王女のご要望とあれば、仕方ありませんね。に、任務ですから」
「だからなんで俺が踊ることは決定済みなんだよ？」
「――よかったですね、先輩。踊ってくれる相手が見つかって」
抗議する古城を横目で睨み、無感情な声で雪菜が告げてくる。
そこで雪菜の存在に気づいた紗矢華が、ビクッと怯えたように肩を震わせて、
「ち、違うの、雪菜。このケダモノから人々を護るためには誰かが犠牲になるしか……」

「ふざけんな。なんでたかがフォークダンスでそこまで言われなきゃならねーんだよ!?」
「いえ、べつに気にしてませんけど。わたしはただの監視役ですから」
息もぴったりに反論してくる古城たちを見て、静かに溜息をつく雪菜。わたしが監視役なのに、と彼女はなぜか不満げに頬を膨らませている。
「で、結局あんたはどうするの？」
浅葱が古城を睨んで訊いてくる。冗談めかして微笑んでいるが、彼女の目だけが笑っていない。なんだこの状況は、と古城はどうしようもなく追い詰められて、
「えーっと……ああっ！　あんなところに落ち武者の幽霊が！」
「は、はい？」
「落ち武者……？」
古城が指さした方角を、驚いて振り返る浅葱と雪菜。その間に古城は学校の外に向かって、脱兎のごとく駆け出していた。
「あ、ちょっと、古城！　待ちなさいよこら！」
「先輩！」
雪菜たちの怒声を背中で聞きながら、古城は脇目も振らずに走る。が、
「――お兄さん？」
「うわ!?」
それから何歩もいかないうちに、目の前に現れた銀髪の少女とぶつかりそうになって、古城は彼女を巻きこみながらその場に転倒した。
少女――夏音が怪我をしないように咄嗟に庇った古城だが、その結果、古城は彼女の胸元に、自分の顔面をずっぽりと押しつける形になってしまう。そんな古城を夏音がそっと抱き起こし、
「あ、あの、お兄さん？　大丈夫でしたか？」
「暁古城！　こ、このケダモノ！」
「なるほど。これが接触感染ですか」
「なにやってんのよ、あんたは……」
「先輩……いやらしい！」
「ま、待て。違う。今のはただの事故だから――」
少女たちの怒りの声と古城の必死の釈明が、〝魔族特区〟の夜空に響いていく。
これは世界最強の吸血鬼、第四真祖に訪れた、束の間の平和な時間の物語――

Episode "Day And Night"
―― The End.

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第8巻初回特典付録
ストライク・ザ・ブラッド・アペンド2
彩祭祭の昼と夜
―第四章―

著／三雲岳斗
イラスト／マニャ子
装丁・デザイン／椛津典彦（G-SQUARE）
協力／株式会社KADOKAWA アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部

© 三雲岳斗／アスキー・メディアワークス／PROJECT STB